

Title	詩神と権力 : 1940年代
Author(s)	武藤, 洋二
Citation	大阪外国語大学学報. 68 p.67-p.83
Issue Date	1985-03-30
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/81041">https://hdl.handle.net/11094/81041</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 詩 神 と 権 力

——1940年代——

武 藤 洋 二

Муза и власть

ムト Ёдзи

## Содержание

- 1 Поэт перед войной
  - 2 Поэт как исполнитель дудки из тростника
  - 3 Поэт, "не желающий идти в ногу со своим народом"
  - 4 Поэт "Реквиема", пишущий дифирамбы Сталину
  - 5 Поэт смерти
- Примечания

## 1

十五年間も詩の発表を禁じられていたアンナ・アフマートヴァは、1940年に再び活字の世界へ入ることが許された。<sup>注1)</sup> ソヴェト共産党と政府は、ナチスとの戦争をひかえて、国民を団結させ、あらゆる層から力をひきだす必要があった。そのために少しばかりの自由が配給された。お上にうとまれている詩人にも、活動舞台があたえられた。

アフマートヴァは、そのおかげで、1940年に雑誌に詩をのせ、一冊の詩集を出すことができた。詩集は『六冊の本から』と名づけられた。これは、1925年までに出した五冊の詩集——『夕べ』(1912年)、『数珠』(1914年)、『白い鳥の群れ』(1917年)、『おおぼこ』(1921年)、『Anno Domini』(1922年)——からの抜粋と、『柳』という新しい詩群からなっている。

『柳』には、始め『葦』という題がつけられた。発表にあたって改題された。これは、葦がもっている危険な象徴的意味を、当局に気づかれないようにするためであった。スターリンが死に、スターリン批判がおこなわれたあとで、元の題名にもどされた。

「沈黙」の時期にもアフマートヴァは詩作をつづけた。しかし、それは密室のなかであり、その作品は印刷されなかった。民衆にとっては、彼女は忘れ去られた詩人であった。1940年の再登場は、読者にとっては、忘却のかなたからの出現であった。

このことをアフマートヴァは、

もの想いに沈む忘却の河のうえで  
よみがえった葦が語りはじめた<sup>注2)</sup>

と詠んだ。

忘却の河レーテは、黄泉の国に流れている。死者は、この河の水をのむと娑婆の苦しみを忘れる。

忘却は二重である。十五年の「沈黙」の時の流れは、忘却の河の流れとなって詩人をのみこんだ。詩人は忘れられた。しかし、忘却のふちのなかで詩人は、この時の流れのなかで起ったことを詩によって永遠化した。スターリンの犠牲者たちについて、『鎮魂歌』<sup>(注3)</sup>の女主人公たちについて、決して口にしてはならないので、民衆は忘却をよそおわなければならなかった。

アフマートヴァは、今あたえられた機会を利用して民衆に語る。詩人は、たくさんの死者をのみこんでいる忘却の河の岸で、葦となって語り伝える。

葦とは何か。

ある日、アフマートヴァは、チウコーフスカヤに東洋の伝説について話した。姉たちが妹を河のそばで殺した。殺人の場所に葦がはえた。春になって牧夫がその葦で笛をつくった。葦笛は殺人について歌った。<sup>(注4)</sup>

葦は、殺された者である。それは、行き場のない怨念が宿っている所である。葦笛は、殺された者の声である。

チウコーフスカヤは、レールモントフの詩『葦』をおもいだした。この作品では、漁師が河のそばで葦を切りとり、笛をつくる。吹いてみると、笛は若い女の声で話しはじめた。ママ母の息子が彼女に言いよった。娘は、こぼんだ。彼は彼女を殺して、岸に埋めた。そこから葦がはえた。その葦のなかに娘の「悲しみが住んでいる」。<sup>(注5)</sup>

殺された者が土に埋められ、その死体が植物に生れかわり、笛にしてもらうのを待つ話は各国にある。

日本にもある。ママ母に実の子とママ子とがいた。父親は、旅にでるとき、二人の子供に笛と太鼓をおみやげに買ってくると約束した。留守中、ママ母は、ママ子を大釜で煮た。肉はとけてしまった。骨は畑に埋めた。そこから竹がはえた。旅まわりの笛吹きがその竹で笛をつくった。父親は、江戸でその笛の音をきいた。父親がそれを買って吹くと、笛は、殺された子の声で、「笛も太鼓もいりません。お江戸のおとちゃんに会いたいな」といった。父親はすぐに帰った。畑に竹が一本はえていた。そこをほりかえすと、わが子の骨があった。しゃれこうべの口から竹がはえていた。父親は、ママ母を殺した。<sup>(注6)</sup>

竹は、葦の変種である。この話では、葦の象徴するものが実にはっきりとあらわれている。竹は、死体の口からはえている。これは、死者が、無念さを語りたくてたまらないことをあらわしている。竹は、口の延長である。

十七年間コルイマーで極限の生活をしたシャラーモフは、自分の変化を観察して、人間の最後の感情は無関心さではなくて憎悪である、と結論した。<sup>(注7)</sup>人間は、憎悪をいだいて死の世界へ去っていった、と彼はいう。<sup>(注8)</sup>もちろん、これは、死が、直接的にも間接的にも、他者によってもたらされた

場合である。

憎悪は、死者のなかでは、怨念になる。この怨念が葦になり竹になる。植物は、みずから笛になることができない。笛をつくり、笛を吹く人間が必要である。

アフマートヴァは、その役を自分にひきうけた。笛をつくるとは、殺された者について詩をかき、笛を吹くとは、その詩を民衆につたえることである。

笛はできている。十五年ぶりにおとずれた印刷の可能性は、笛を吹く機会である。しかし、それは、危険である。

第二次大戦が始まっていた。1939年8月23日独ソ不可侵条約がむすばれ、ドイツは、ソヴェートの手をしばったうえで、9月1日ポーランドに進撃し、第二次大戦がはじまった。1940年は、ドイツ軍がヨーロッパ諸国を次から次へと占領していった年である。不可侵条約があるとはいえ、ドイツ軍がソヴェートにくるのは時間の問題であった。1941年4月13日に日ソ中立条約が調印された。ドイツとの戦争のさい背後から日本にやられないために、この条約は必要であった。スターリンが、松岡洋右外相を駅まで見送ったほど、この条約は大切であった。これから二ヵ月ほどして、ドイツ軍はソ連になだれこんだ。1941年6月22日独ソ戦がはじまった。これは、アフマートヴァの五十二回目の誕生日の前日であった。レニングラードは、ドイツ軍に包囲され、アフマートヴァは、タシケントへ疎開するため、九月にレニングラードをはなれた。タシケントで1943年に選集をだすことができた。

1940年は、第二次大戦の勃発と独ソ戦の開始との間の時期である。この年にアフマートヴァは、雑誌『レニングラード』と『星』に十編以上の詩を発表した。<sup>(19)</sup>その中へ葦笛の役をはたす詩を、細工して、まぎれてませるのに成功した。

## 2

それは三つあった。

第一の詩は、『ヴォローネシ』である。これは、『レニングラード』の1940年の第2号にのせられた。

アフマートヴァは、1936年春に詩人オーシプ・マンデリシタームを流刑地ヴォローネシを訪ねた。詩『ヴォローネシ』は、詩人の流刑地を歌ったものである。1940年にこの詩をアフマートヴァが発表したとき、友人マンデリシタームはすでに死んでいた。流刑地の詩は、コルイマーの収容所の手前で行き倒れになった詩人への挽歌になった。

三十年代の大量殺人について、昨日の死者について、今日語ることは、命の危険をとまなう。詩は、誰れを歌ったのか秘めたまま、しかも、その町が流刑地であることも隠して、ただそこが氷づけであることだけを伝えた。

町はすべて氷づけで

木も壁も雪もまるでガラスばり

水晶の間を私はおずおずと行く<sup>(註10)</sup>

詩は、このように始まる。厳寒はヴオローネシをガラスの町にした。木は氷のために水晶の柱になっている。ポプラ並木がゆれると、ガラスの盃がふれあったような音がする。生命あるものはすべて、氷の下にある。流刑中の詩人は、氷の下の一隅にひそんでいる。

アフマートヴァは、時代の状況を氷にたとえることはできた。しかし、流刑中の詩人について書くことは許されない。彼女は、最後の四行を印刷しなかった。

寵を失った詩人の部屋では

恐怖と詩神が交代で番をする、

夜明けを知らない

夜がふけていく。<sup>(註11)</sup>

氷の世界で恐怖と差しむかいで詩をかく詩人を登場させることは、1940年では、作者の破滅を意味した。<sup>(註12)</sup>『ヴオローネシ』そのものが恐怖と詩神の共存する状況からかかれた。アフマートヴァは、この四行を時代が変わるまで記憶のなかに保存する。

『ヴオローネシ』は、これをすてることによって、ロシヤの冬を詠んだ一編の叙景詩をよそおうのである。

読者の誰かが、氷づけの町から時代状況を読みとるかもしれない。詩は、この場合、民衆への信号である。民衆は、気がつくかもしれない。気がつかないかもしれない。そこに詩と詩人との運命がある。

第二の詩は、『判決』である。

アフマートヴァは、戦争による自由の配給を利用して、『鎮魂歌』の第七歌『判決』を雑誌『星』(1940年、3・4号)に発表した。原稿をつくることすら恐れ、記憶のなかにしまいこまれていた詩を、『ヴオローネシ』と同じように、作品の対象を隠すことによって、印刷することができた。

『判決』という題は、危険である。詩は無題になる。1939年6月22日という執筆の日付を五年早くして、1934年に変える。レフが最初に逮捕されたのは、1935年なので、1934年にしておけば、息子をシベリヤの収容所へ送る判決を聞かされた母親についての詩であることは、感づかれなはずである。囚人の母親の苦しみは、人生一般に誰れにでもおこる苦しみに一般化されてしまう。この一般化への解消によって、詩は民衆の目にふれることになった。

判決は、詩のなかで、「石の言葉」と表現される。判決は、石となって自分の胸のうえに落ちた。これに耐えるためには、自分の胸を石にかえなければならない。息子についての記憶を完全になくさなければならない。アフマートヴァは、スターリンによる人間狩りについて語ることも感情をあらわすことも許されないとき、その許されないものを詩によって永遠化した。彼女は、民衆の記憶係であった。

記憶の放棄は、したがって、詩人の立場の放棄である。『判決』のなかに居るのは、詩人ではなくて、母親である。

「石の言葉」の具体的な内容に気づいた読者がどれほどいたか分らない。おそらく、大部分の読者は、偽装によってであれ、そのような内容の詩が活字になる可能性すら信じなかっただろう。

それと同時に、原因をふせられたまま語られる苦しみへ、一般化さればかされた苦しみの詩的表現へ、スターリンの犠牲者の家族たちが自分自身の苦しみを重ねなかっただろうか。雑誌『星』がでているレニングラードは、どこよりも犠牲者が多かった所である。読者が自分の苦しみの表現を自から詩のなかに見つけたとき、葦笛がひびくのである。

三つ目の詩は、『柳』である。

これは、同じく『星』の1940年3・4号に題をつけないで発表された。

もよう入りのしじまのなかで、

若い世紀の涼しい子供部屋で私は育った。

人の声は私にはいとしくなかった、

風の音が私には分りやすかった。

私が好きなのはやはりあざみといら草、

しかし何よりも銀色の柳だった。

恩を忘れない柳は私と一生をすごした、

しなだれた枝を使って眠れぬ夜を夢でみたしてくれた。

不思議なことに、私は柳より長生きした。

そこに切株がつき出ている、

他の柳たちが他人の声で何かを語っている、

私たちの、あの空の下で。

私は黙っている……まるで兄弟が死んだように。(1940年)<sup>註13)</sup>

「もよう入りのしじま」とは、ツアールスコエ・セローの静かな森のことである。アフマートヴァは、1890年から約十五年間ツアールスコエ・セローに住んだ。彼女は、十六才になるまでここにいたので、この町は彼女の人生の「子供部屋」になる。それは、また、「若い世紀」——二十世紀初頭——の「子供部屋」である。そこには、まだ、それ以後の歴史的な激動をしらない子供の世界の平和があった。<sup>註15)</sup>

彼女がなによりも愛した柳とは、最初の夫ニコライ・グミリヨーフだと考えられる。アフマートヴァが、彼と始めて会ったのもツアールスコエ・セロー時代である。詩人グミリヨーフは、反革命活動のため銃殺された。<sup>註16)</sup>「不思議なことに、私は柳より長生きした」とは、このことを指す。柳の方が先に死んでしまったのである。「そこ」とは、柳が生えていた場所である。柳は自然死したのではない、その証拠に、今、切株になっている。柳は切り倒されたのである。切株は、詩人グミリヨーフの殺人現場であり、同時に、詩人の死体そのものである。

「他の柳たちが他人の声で何かを語っている」とは、仲間の柳たちが、切株になったいきさつについて物語っていることをあらわす。「他人の声で」とは、殺された本人はしゃべれないので、代って死者の声で殺人について語っていることを意味する。これは、葦笛の役である。

しかし、「私は黙っている……」。アフマートヴァの沈黙は、常に二重の、表裏の、かって付とかって無しとの、二つになる。

彼女は、公表せず、原稿もつくらなかったが、『鎮魂歌』のなかにグミリヨーフの死をすでに詠んでいた。<sup>注17)</sup>「まるで兄弟が死んだかのように」は、この詩が誰れかへの挽歌であることを暗示している。あたかも兄弟が、つまり、夫が、死んだのである。

童話風の詩『柳』は、葦笛のかなでる挽歌である。<sup>注18)</sup>

『ヴォローネシ』、『判決』、『柳』は、「寵を失った」三人の詩人マンデリシタム、アフマートヴァ、グミリヨーフの運命を語っている。十五年ぶりにおとずれた発表の機会を利用して、アフマートヴァは、偽装しながら葦笛吹き役を演じたのである。

### 3

1945年5月7日ドイツは無条件降伏した。戦争がおわると、今までの手ぬきを一举にうめるために、文学、芸術、学問におけるひきしめが始まった。それは、戦時中の自由の貸しをとりたてる仕事であった。

文学界では、散文からミハイール・ゾーシチェンコ、<sup>注19)</sup>詩からアフマートヴァが人身御供にされた。

1946年8月14日付の党中央委員会決定によって、アフマートヴァは、再び活字の世界から追われた。ジダーノフ批判と呼ばれるこの決定は、アフマートヴァに束の間の登場を許した雑誌『星』に、ゾーシチェンコ、アフマートヴァのたぐいをよせつけないことを義務づけ、雑誌『レニングラード』を廃刊にした。<sup>注20)</sup>『星』の編集長には、党中央委員会宣伝部副部長アレクサンドル・エゴリーンが任命された。これは、党中央による雑誌の直接支配を意味した。

アフマートヴァが批判の対象としてえらばれたのは、(1) 彼女が「人民に無縁な空虚で無思想的な詩の典型的な代表者であり」、<sup>注21)</sup>(2) その作品は「人民と共に歩むのを望まない、古いサロンの詩の好みであらわしており」、<sup>注22)</sup>(3) 「青年の教育上有害であり、ソヴェト文学のなかでは寛容できない」からである。<sup>注23)</sup>

アフマートヴァは、非人民的で有害な詩人として、ソヴェト文学から追放された。まもなく発行されることになっていた戦後初の彼女の詩集は、<sup>注24)</sup>破棄処分になった。1946年9月4日彼女は、ソヴェト作家同盟を除名された。

アフマートヴァは、戦争中に戦意高揚の詩もかいた。そのうちの一つ『勇気』は、1942年3月8

日のプラウダにのった。ついこのあいだまで発表を禁じられていた詩人が、ほかならぬプラウダに登場したことは、もし詩の内容と方向を選択すれば、「寵を失った詩人」の立場からぬけだせることを示している。ドイツ軍との戦いをはげますことは、詩人の意に反することではない。アフマー トヴァの戦時むけの詩は、詩として高い価値をもたないが、それでも他の詩人の戦意高揚の詩とは、ちがう。

# 勇気

今なにが天秤にかけられ  
 なにが行われているか私たちは知っている。  
 私達の時計が勇気の時を告げた、  
 勇気を私達は失わない。  
 弾丸の下で死ぬのは恐くない、  
 家がなくなってもつらくない、——  
 私達は、お前を、ロシヤ語を、  
 偉大なロシヤのことばを守りとおす。  
 お前を自由で清いままにもちこたえ、  
 孫に贈り、とらわれの身から救おう

永久に！

1942年2月23日

タシケント<sup>(註25)</sup>

ヒトラーに対するのは、スターリンである。しかし、これは単なる善悪の対決ではない。ファシズムの軍隊が祖国の奥深くはいりこみ、あらしまわり人を殺しているとき、詩人は、戦いをはげますことはできる。しかし、スターリンを称えることはできない。スターリンは、反ファシズムの旗じるしにはなりえない。現に、無実の罪で息子が収容所で働かされている。ドイツ軍がくる前に大量の血が流されている。

だから、アフマー トヴァは、ロシヤ語をとりあげた。彼女は、詩人がかけねなしに称えることのできるもの、母国語を守りぬく勇気をもつようと呼びかける。

誰れから守るのか。誰れのところで、それは「とらわれの身」になっているのか。

ファシスト軍からロシヤ語を守るという当然の訴えの裏に、スターリンの恐怖政治によって自由と清らかさを失っていく母国語の運命が暗示されていないだろうか。恐怖のためにたてまえでしか語れず、自分の個性を反映した文章すら危険であり、灰色という保護色に言葉を染めていかざるをえない状況から、ロシヤ語を守ろう、「とらわれの身」から救いだそう、という訴えがかくれているようにおもえる。

母国語を自由で汚れないままで後世に伝える勇気は、なによりもまず詩人に欠かせない。この勇気を、アフマー トヴァ自身がためられることになる。



ジダーノフ批判のあと、彼女は外国人の前にひきだされた。これは、党による批判のあとも彼女の生活は順調で、批判は正しく、党は正しいことを、アフマートヴァの口から語らせるための政治的行事であった。

自分自身も権力と芸術家との間のさまざまな劇に登場せざるをえなかった作曲家ドミトリイ・シヨスタコーヴィッチによれば、アフマートヴァにジダーノフ批判をどう思いますかときくことは、不良につばをはきかけられた人に、「つばをはきかけられてどういう気持ですか」ときくに等しい。しかも、アフマートヴァの場合、当の不良が同席している場で質問されたのだから、もっと始末がわるい。<sup>注26)</sup>

「アフマートヴァは、立ちあがって、同志ジダーノフの演説と党の決定は絶対的に正しいと思うとのべた。もちろん、彼女の行動は正しかった。これは、恥しらずの無情な外国人をあつかう唯一の方法であった。彼女は、何をいうことができたのだろうか。精神病院に住んでいる気持ですというのか。ジダーノフとスターリンを軽べつし憎んでいるというのか。そう、彼女は、そのようにいうことはできただろう。しかし、そうすれば、もうだれも二度と彼女を見ることはできなくなっただろう。」<sup>注27)</sup>

これは、高い評価と殺人的な批判を交互にあたえられ、死の危険を感じながらスターリン時代を生きたシヨスタコーヴィッチの証言である。

#### 4

1949年息子のレフが三たび逮捕された。

この年の12月21日スターリンは、七十才の誕生日をむかえた。詩人たちは、祝賀の詩をささげた。作家同盟の機関誌『新世界』は、12月号をスターリン慶賀の特別号にした。そこには、『諸国民の指導者スターリンへ、七十才の誕生日に』と題して、ソヴェトと「人民民主主義諸国」の詩人の讃歌が集められた。

アレクセイ・スルコーフの詩が巻頭にかかげられた。この年に作家同盟の書記になったスルコーフの詩は、『名前は旗じるし』と題されている。世界中の働く者がスターリンをしたっている、スターリンの名は彼らの旗じるしになっている、と作家同盟書記はいう。彼は、世界の地名をちりばめて、スターリンへの敬愛が全世界的であることを強調したのち、宣言する。

どの国でも人びとは知っている、

スターリン——  
○○ ○○

これは戦争がおこらないこと！

スターリン——  
○○ ○○

これは自由に生きること！

スターリン——  
○○ ○○

これは社会主義を創ること！

だから

地球のはてしない広がりの中かで、

ヴェイクラ河で、

ガンジス河で、

近くで遠くで、

さまざまな言葉で、

またも

またも

聞える

しっかりした、はっきりした言葉——

スターリン！<sup>(註28)</sup>  
○○ ○○

文学界の組織者スルコフは、スターリンの名を呪文のようになえる。スターリンは九回くりかえされ、そのうち六回は、全文字が大文字である。独裁者の名が、神への呼びかけのように反復される。スルコフは、民衆を前にして独裁者の横にたち呪文をとる祭司である。祭司には、民衆に語りかけるための、あるいは、神に語るのを民衆にきかせるための、特別なひびきをもった言葉が必要であった。それは、民衆操作のための言語的手段であった。だから、祭司は、詩人であることが望ましかった。

『新世界』の特別号に名をつらねる他の詩人たちは、宮廷詩人スルコフの音頭のもとでスターリン讃美の合唱をしている。

国をあげてスターリンの誕生日が祝われるとき、それに参加しない者は、要注意人物になる。スターリン時代は、一般的に、自分の個性が目立つだけでも危険であった。虫たちが環境と同じ色になって個を抹殺することによって、命を守るように、作家や詩人も保護色に自分をぬりかえた。

この時代を生きぬいた作家ヴェニアミン・カヴェーリンは、義兄ユーリイ・トゥイニャーノフの代表作『ヴァジル・ムフタルの死』の初版（1929年）から作者生前の最後の版（1937年）までの各種の版を比較した。ふつう最後の版が最良であるが、大粛清の年1937年の版を用いることはできない。なぜなら、「非創作的な変更」が加えられているからである。1935年、1936年の版にもこの種の非文学的操作がなされている。それは、「平板にするための、単純化するための、文体的に無個性にするための訂正である」。<sup>(註29)</sup> カヴェーリンによれば、この種の化粧なおしは、1930年代のソヴェト文学では、おなじみのことであった。<sup>(註30)</sup>

このような保護色化は、文体だけでなく、内容、引用文献の種類、スターリンへの言及の仕方にもおよぶ。

スターリンが七十才になった前後の時期には、頭をつかっておこなう人間活動のあらゆる面で徹

底的な再統制がおこなわれ、画一化されているものがさらに画一化された。

個性をもつことすら不用心であったこの時代に、万人のスターリン祝賀に加わらないのは、危険である。レフが三度目に逮捕されたばかりのアフマートヴァにとって、スターリンの誕生日は、息子の助命運動のための機会でもあった。ジダーノフ批判は、学校で教材として使われ、アフマートヴァは、反人民的で有害な詩人として学童に教えられた。マリエッタ・シャギニヤーンは、ジダーノフ批判をたずさえて全国を講演旅行した。この状況のなかで、アフマートヴァは、息子に死の危険を感じた。スターリンの犠牲者のために詩をつくってきたアフマートヴァは、一人の母親として息子を助けるために、スターリンへ讃歌をささげる決心をした。その詩は、助命嘆願の役をはたさなければならなかった。

『鎮魂歌』の作者が讃歌をかく。これは、『鎮魂歌』への裏切りであり、同時に、その一部である。なぜなら、この方便としての、手段としての、偽の讃歌は、犠牲者である息子レフの命ごいのためだからである。

万葉の時代、国に良いことがあるのを願って国ぼめの歌がつくられた。良い言葉を国にあびせれば、その言霊が国に善をもたらすとおもわれた。良い意味をはらんでいる言葉の精が、現実へ乗り移るのである。だから、国ぼめの歌は、現実はまだ存在しない良いことを表現する。そこでは、望ましい現実が、現状のように表現される。

スターリン時代には、言霊信仰ぬきの国ぼめの歌がつくられた。それをつくることは詩人の義務でもあった。それをはたさずには、詩人として生活することは困難であった。「寵を失った詩人」が、どん底からの脱出のために、国ぼめの歌をつくることもあった。

アフマートヴァは、『平和をたたえる』という詩群をつくった。これは、国づくりとその指導者であるスターリンへの讃歌である。まず平和がたたえられ、それをもたらした者としてスターリンがあがめられる。この詩群に、スターリン誕生祝賀の詩『1949年12月21日』が入っている。

スターリンがもたらした死とその死がもたらしたものを詩に記録してきたアフマートヴァは、「恐ろしい死からわれわれ皆を救った賢人」スターリン<sup>(註31)</sup>の誕生日を“祝う”。この偽の祝典歌は、ただ民衆が喜びと感謝にみちていると伝えるだけである。これだけでは、足りない。効き目が無い。彼女は、無題の讃歌をつくる。それは、スターリンを国主とする国ぼめの歌である。

あの人は驚の目で  
クレムリンの高みから見た、  
改造された大地が  
光にみちあふれているのを。

あの人の仕事と活動の  
数えきれない成果があの人の前にある――  
巨大な建造物の大群、

橋、工場、公園が。

あの人はこの町に自分の魂を吹きこんだ  
私達が災いにあわないようにしてくれた、——  
だからモスクワの不屈の魂は  
あのようにはつらつとし若わかしい。

感謝する民衆の声を  
あの人は聞く。「私達はやって来た  
『スターリンの居るところ自由がある、  
平和と国土の偉大さがある』と云うために。<sup>注32)</sup>

これは、アフマートヴァにとって、詩ではない。嘘は、芸術的価値をもたない。

光かがやく国土をクレムリンの高みから見おろしているスターリンは、神である。民衆は、お礼を云いにやってくる受身の存在である。

アフマートヴァが人知れずつくった詩のなかでは、クレムリンは、民衆の恩人の住いどころか、民衆とは無縁な権力亡者の巣窟である。

クレムリンに住んではいけない プレオブラジエンスキ連隊は正しかった / / ここには古の  
憤怒の微生物がうようよしている / / ボリスの動物的な恐怖 あらゆるイヴァンたちの悪  
意 / / 僭称者の傲慢さ——民衆の権利の代りに<sup>注33)</sup>

僭称者ボリス・ゴドゥノフやイヴァン雷帝を代表とするイヴァンと名のつくすべての支配者たちの激情の舞台クレムリンに住むな。権力病の細菌に感染するだけだ。そこには民衆の権利は全くない。だから、そこに住んではいけない。

アフマートヴァは、スターリンの住いとしてのクレムリンについて語っている。

スターリンは、イヴァン雷帝をほめたたえた。雷帝の“偉大さ”は、全国民に宣伝された。クレムリンの先住者のなかで最大の殺人者であったイヴァン雷帝にたいする崇拜と親近感、スターリンと古の権力者との結合と継承を示している。

アフマートヴァがこの詩をつくった1940年に、エイゼンシュテインは、『イヴァン雷帝』の脚本にとりかかった。第一部は、1945年に公開され、46年スターリン賞をうけた。しかし、第二部は、1946年9月4日付の党中央委員会決定によって批判された。雷帝が根性のない、まるでハムレットのようにえがかれていること、その親衛隊がクウ・クルクス・クランのようにあつかわれていること<sup>注34)</sup>が、党中央、つまり、スターリンの気に入らなかった。その結果、雷帝崇拜に役立たない第二部は上映を禁止された。エイゼンシュテインは、ロシヤで最初に皇帝と名のつた血まみれの独裁者を、スターリンを意識して美化しながら、スターリンの気に入るようには美化しきれなかった。

権力者が血を流す歴史的な場面の端にスターリンをおきながら、アフマートヴァは、次のような詩もつくった。

野蜜は果てしない広がりのおい  
埃は日光のおい  
すみれのおいがするのは乙女の口  
金は無臭  
水のおいがするのは木犀草  
りんごのおいがするのは恋  
しかし私達は永久に知った  
血のおいがするのは血だけであることを……  
むなしくもローマの代官は  
俗衆の不吉な呼び声にせかされて  
全民衆を前にして手を洗った  
スコットランドの女王は  
むなしくも小さな掌から  
赤いしぶきを洗い流した  
王宮のなまあたにかい闇の中で……(1933年)<sup>(注35)</sup>

ローマの代官とは、ローマ帝国のユダヤ総督ポンテオ・ピラトゥスのことである。彼の統治下でイエスが十字架にかけられた。

手を洗うとは、聖書では、自分に罪がないことを示す動作である。群衆がイエスを十字架につけよと叫ぶので、ピラトゥスは、「水を持って来させ、群衆の前で手を洗って云った。『この人の血を流すことについて、わたしには責任がない。お前たちの問題だ』」。<sup>(注36)</sup>

スコットランドの女王とは、マクベス夫人である。

血のおいとは、ほかにたとえることができない。血は血のおいししくない。このことを「私達は永久に知った」。「私達」とは、スターリン治下のソヴェト人である。ピラトゥスもマクベス夫人も、現在の流血を暗示するために登場させられた。この流血は、決して洗いおとせない。スターリンは、ピラトゥスのように民衆の前で手を洗わない。彼は、沈黙を強制する。しかし、沈黙のなかで血は血でありつづける。詩人は、沈黙をよそおいながら、血について詩をつくる。

しかし、今、アフマートヴァは、スターリンに讃歌をささげた。クレムリンを、「永遠の光のための闘士」<sup>(注37)</sup>と呼んだ。秘密の詩では闇だとかき、讃歌では光だと歌った。そして、もっとも両立しないものを一つにしてしまった——「スターリンの居るところ自由がある」。この点では、「スターリン——これは自由に生きること！」と唱えたスルコーフと同列である。

スターリン讃歌は、息子を救うための母親としての行為であった。詩人としては、「汚点」であった。この奴隷の詩を、アフマートヴァは決して自分の詩集にいれなかった。

高村光太郎は、天皇崇拜という「重荷」をせおって生きてきた。父光雲は、明治天皇のまえて彫刻を作ったとき、天皇をまともに見るができなかった。そんなことをすれば、眼がつぶれると思っていた。このような父の君臨する家で、光太郎も天皇崇拜者になった。

太平洋戦争がはじまった日に光太郎はかいた。

天皇あやふし。

ただこの一語が

私の一切を決定した。<sup>注38)</sup>

この決定とは、

身をすてるほか今はない。

陛下をまもう。

詩をすてて詩を書かう。<sup>注39)</sup>

ということであった。

光太郎は、天皇をあがめながら、天皇を守るための、聖戦勝利のための詩をかくことは、詩作ではないと考えた。そこに生れるものは、詩であって詩でない。その仕事は、「詩をすてて詩を書く」ことである。

光太郎は、彫刻家の立場から次のように考えている。

「人生そのものには必ず裸がある。むしろ、眼を転ずれば人生そのままが既に裸だと云えるのであろう。けれど人間の手に成るものは必ずそうとも限らない。人間の手に成る作品を見て、その中に実存する裸の力に触れるのは愉快である。作られ方の力ではない。またその傾向の力ではない。作られ方も傾向も皆充分考慮に値する。けれども考慮は結局時代に関する。動かしがたいものを根源に探る触覚が、一番はじめに働き出す。その怪しいもの、もしくは無いものは掴むとつぶれる。いかにも弱々しい、または粗末らしい形をしたものでもこの根源のあるものはつぶれない。詩でいえば、例えばヴェルレエヌの嗟嘆はつぶれない。ホイットマンの非詩と称せられる詩もつぶれない。そんなもののあってもなくてもいい時代が来てもつぶれない。通用しなくても生きている。性格や気質や道徳や思想や才能のあたりに根を置いている作品はあぶない。どうにもこうにもならない根源に立つもの、それだけが手応を持つ。この手応は精神を一新させる。それから千差万別の道が来る。<sup>注40)</sup>」

日米開戦の十三年前にかかれたこの文章は、天皇守護戦争勝利のための詩が詩でなく、それをつくるのが「詩をすてて詩を書く」くことになってしまう理由を説明している。

「詩をすてて詩を書く」という表現のなかに、光太郎の分裂が反映されている。彼は、詩と詩で

ないものとの二種類をかくことになる。しかも、戦時体制への奉仕にも懐疑がまじっていた。

ロマン ロランは云ふやうだ。

——パトリオチズムの本質を

君はまだ本気に考へないのか。<sup>註41)</sup>

しかし、

さういふ時に鳴るサイレンは

たちまち私を宮城の方角に向けた。

本能のやうにその力は強かった。<sup>註42)</sup>

ここには、否定へ傾いたとき、最も強く肯定へ帰ろうとする分裂者の運動法則がみられる。

この分裂した詩人は、どちらへも力をそそぐことによって平衡をたもつ。

私には二いろの詩が生れた。

一いろは印刷され、

一いろは印刷されない。

どちらも私はむきに書いた。<sup>註43)</sup>

アフマートヴァにも「二いろの詩」ができた。しかし、アフマートヴァと光太郎、この同時代人のあいだには、共通点よりも相違点のほうが多い。アフマートヴァは、手段としてスターリン讃歌をかいた。それは、息子への救命具にすぎなかった。呪いの代りの讃歌であった。光太郎は、「どちらも私はむきに書いた」ということができた。アフマートヴァは、スターリンを憎悪し、光太郎は、天皇を崇拜していた。だから、「二いろの詩」の距離は、光太郎の場合みじかい。アフマートヴァの場合、二つは、表と裏であり、両極である。

六十才のアフマートヴァは、「詩をすてて」スターリン讃歌をかくことによって、詩神への裏切りという代償をむなしくはらっただけにおわった。息子は、収容所から帰ってこなかった。しかし、レフが殺されなかったことで、詩の効果はあったのだろうか。レフが生きながらえたことと、讃歌との関係は不明である。

ジダーノフ批判によって活字の世界から追放されていたアフマートヴァは、『平和をたたえる』を活字にすることができた。スターリンをたたえたこの詩群は、1950年の雑誌『ともしび』にのせられた。

これは、讃歌が公的に受理されたことを意味する。むだではなかった。しかし、「汚点」が印刷され、後世に残ることは、詩人にとって恥辱であった。それと同時に、このような運命は、詩人であるかぎり、当然のことであった。

なぜなら、

刑吏と死刑台なしには、

詩人はこの世におられぬしくみ。

詩人には懺悔服、

ろうそくを持って歩み泣きさけぶのが定め。<sup>注44)</sup>

この定めは、次のように具体化される。

皆去った、だれも帰らなかった、  
ただ、愛の誓いに忠実な、  
私の最後の人間、お前だけがふりむいた、  
全天血におおわれているのを見るために。  
家は呪われ、仕事も呪われ、  
歌は空しくもやさしくひびく、  
自分のおそろしい運命の前で、  
私は目をあげることができなかった。

37年の付そいと共に  
私が血だらけの床を洗うために、  
至純の言葉は汚され、  
神聖なことのほは踏みにじられた。  
一人息子と引き離なされ、  
獄舎では友が拷問され、  
密なる尾行の  
目に見えない柵でかこまれた。  
私に沈黙が贈られた、  
全世界にむかって忌わしくも呪われながら、  
私は中傷で満たされた、  
私に毒が盛られた、  
ぎりぎりのところまで連れていかれながら、  
なぜかそこで手をはなされた。

町の狂人である私には、  
死の前の広場をうろつくのは楽しい。<sup>注45)</sup>

ここに列挙されている仕打ちは、詩人と権力との関係史である。「ぎりぎりのところまで」、つまり、死刑台まで連れていかれながら、台の上にはのせられなかった。詩人は、狂人となって、その台のまわりを、「死の前の広場を」、さまよう。

しかし、この狂人は、すみかへ帰ると詩をつくった。

スターリンが死んで、スターリン批判がおこなわれ、アフマートヴァが「ぎりぎりのところ」から歩み去ったころ、この時代をおもって、詩が生れた。

詩神は聞えず盲いて、  
地中で種となって朽る、



後で、灰の中から蘇えった不死鳥のように、

青い大気の中で身をおこすために。<sup>注46)</sup>

強制された沈黙が、土中の生活にたとえられる。しかし、詩人は、スターリン治下で、土の中で朽ちていたのではなく、恐怖を道づれにしながら、まさにそこで詩神と共に生きていたのである。この生活のなかから『鎮魂歌』が、葦笛の詩が、生まれた。

詩人は、土の中で仮死をよそおいながら、多くの死について歌い、死を歌うことによって生きつづけた。

(連作第二部おわり)

## 注

1 1925年から1940年の間、詩以外のもの——プーシキンについての評論とルウバンスの手紙の翻訳——は、活字になっている。1925年の党の決定は、詩人としてのアフマトヴァを迫らした。もちろん、詩以外のものが、かたんに印刷されたわけではない。彼女は、一般的に活字の世界から遠ざけられていた。

なお、1930年代のアフマトヴァについては、拙稿『「鎮魂歌」の時代—1930年代—』(連作第一部)(大阪外国語大学学報、第67号(文学編)、1984年)を参照。アフマトヴァに関する基本的な事柄については、この論文でふれたので、本稿ではそれについて反復説明はしない。

2 Анна Ахматова, Стихотворения и поэмы, Библиотека поэта, Большая серия, Л., "Советский писатель. Ленинградское отделение", 1977, стр. 183.

以後の引用では、この版は、BP とのみ記す。

3 拙稿『「鎮魂歌」の時代』参照。なお、『鎮魂歌』の内容については、別稿で扱う予定である。

4 Лидия Чуковская, Записки об Анне Ахматовой, т. 2, Paris, YMCA-PRESS, 1980, стр. 98.

5 М. Ю. Лермонтов, Собрание сочинений, т. 1, М., "Художественная литература", 1975, стр. 452.

6 『日本の民話』、10、松谷みよ子、瀬川祐男、辺見じゅん、角川文庫、昭和58年、124-126頁。

7 Варлам Шаламов, Колымские рассказы, 2-ое издание, Paris, YMCA-PRESS, 1982, стр. 885.

8 同上890頁

9 1940年に雑誌『レニングラード』と『星』に発表された詩は、次のとおりである。

"Ленинград"

Художнику. Здесь Пушкина изгнание началось. Один глядится в ласковые взоры. От тебя я сердце скрыла. Воронеж.

"Звезда"

Двустилшие. Борис Пастернак. Годовщину последнюю праздную. Ива. Когда человек умирает. Маяковский в 1913 году. Мне ни к чему одические рати. Приговор.

10 BP, стр. 190.

11 同上

12 シゲノフ批判後はじめて出たアフマトヴァの詩集(国立文学出版所、モスクワ、1958年)は、1909年から1957年までの詩をおさめた小さな選集である。この版では、『ヴォローネシ』は、O. M. (オーシブ・マンデリシタム)という献げる相手の名がなく、執筆時は1936年となっている(同書41頁)。最後の四行は、はぶかれたままである。1961年に同じ出版所から出された小型のアフマトヴァ詩集は、上記の版と同じあつかいである。アフマトヴァ在世中最後の詩集『時は走る』(「ソヴェトの作家」、モスクワ—レニングラード、1965年)では、O. M. と明記され、執筆時は1936年で、最後の四行が印刷されている。アフマトヴァは、死の一年前に、そして詩が最初に発表されてから二十五年後に、完全な形で読者につたえることに成功した。

- 13 БП, стр. 194.
- 14 革命前は皇帝の避暑地で、宮殿があった。プーシキンをはじめ多くの詩人や作家と関係の深い町で、「詩神の町」とよばれる。現在のプーシキン市のことである。レニングラードの郊外にある。
- 15 『鎮魂歌』の第四歌参照。
- 16 地理学者タガンツェフ教授の仲間として銃殺された。Марк Поповский, Управляемая наука, London, Overseas Publications Interchange Ltd, 1978, стр. 19.
- 17 『鎮魂歌』の第二歌と終歌。
- 18 『柳』には、Дряхлый пук дерев という一行がかかげられている。これは、プーシキンの詩『ツアールスコエ・セロー』に入っている。アフマートヴァは、プーシキンのこの詩の内容から、あるいは、そこにある言葉——柳、墓場、別れ——から、『柳』が伝えようとしているものをくみとるように、読者へ信号を送くったのだろうか。
- 19 1895–1958. ソヴェトを代表する諷刺作家。ジダーノフ批判の衝撃から作家としてたかなおることはできなかった。
- 20 1896–1959. 文芸学者としてはネクラースフについての業績がある。1946年にアカデミー準会員になった。
- 21 О журналах "Звезда" и "Ленинград" /.../, М., "Госполитиздат", 1951, стр. 4.
- 22 同上
- 23 同上
- 24 Стихотворения 1909–1945, М. – Л.: ГИХЛ, 1946.
- 25 БП, стр. 212.
- 26 Testimony. The Memoirs of Dmitri Shostakovich. Translated from the Russian by Antonina W. Bouis, Harper and Row. New York, 1979, p. 203
- 27 同上 203–204 頁
- 28 Новый мир, 1949, №12, стр. 5.  
傍点の部分は、原文では大文字。
- 29 Юрий Тынянов, Смерть Вазир-Мухтара, Л., "Художественная литература", 1975, стр. 461.  
В. Каверин と Е. Тоддес による注。
- 30 同上
- 31 Анна Ахматова, Сочинения, т. 2, München, "Международное литературное содружество", 1968, стр. 150.
- 32 同上 150–151 頁。
- 33 Памяти А. Ахматовой, Paris, YMCA-PRESS, 1974, стр. 19.
- 34 О журналах "Звезда" и "Ленинград", стр. 21.
- 35 БП, стр. 191.
- 36 『マタイオスによる福音』27–24 (新約聖書共同訳、日本聖書協会、1978年、107–108頁。)
- 37 Сочинения, т. 2, стр. 150.
- 38 『日本詩人全集9 高村光太郎』、新潮社、昭和41年、168頁。
- 39 同上
- 40 高村光太郎、『芸術論集 緑色の太陽』、岩波文庫、121頁。
- 41 『日本詩人全集9 高村光太郎』、169頁
- 42 同上
- 43 同上
- 44 Памяти А. Ахматовой, стр. 10.
- 45 同上 25 頁。
- 46 БП, стр. 298.